

連載

# 市長室からは こんにちは

vol. 85



益田市長  
山本 浩章

歴史上「リンガフランカ」とされた言語がいくつかあります。国や民族を越えた共通言語のことで、古代から中世にかけてはギリシア語やラテン語、漢文などがその役割を果たし、近代のヨーロッパ外交においてはフランス語が多用されました。そして現代、事実上の世界共通語となっているのが英語です。

英語は数奇な歴史を持つ言語といえます。発祥地は現代のドイツとデンマークの国境に近いユトランド半島南部。5世紀半ば、ここから海を渡ってブリテン島に住み着いたアングロサクソン人が、それまで土着の言葉だったケルト語を片隅に押しやり、徐々に英語の原型を形成しました。

ところが、1066年にイギリス全土がフランスに占領されると、英語は一転して支配者の言語であるフランス語に屈服させられます。しかし、それでもしぶとく生き残ったう

え、フランス語の単語を大量に取り込むことで、結果的に言語としての多面性と表現力を飛躍的に高めました。

いち早く産業革命に成功したイギリスはやがて最強の海洋国家として世界の至るところに植民地を獲得し、日の沈まぬ帝国と呼ばれるまでになりました。それに伴い、英語も世界に広まります。さらに、20世紀の2度の世界大戦を経て世界の覇権が今度はアメリカに移ったことや、国際連合がニューヨークに本部を置いたことなどで、英語の国際的地位は絶対的なものになりました。

近年これに拍車をかけているのがインターネットの普及です。世界のウェブ上での英語のシェアは5割を超えますが、こと学術論文やジャーナリズムに関してはさらに圧倒的割合を占めます。

私事ながら、昨年5月にアイルランドを訪問した際、英語力の著しい衰えを痛感し、一念発起して英語学習を始めました。今年の6月に挑戦した英語の検定試験ではあえなく不合格となりましたが、再起を期しているところです。

国語が大切なのは当然として、来年からは小学校でも英語が正式の教科となるなど、その必要性はさらに高まることでしょう。

## 中世益田講座「益田氏 VS 吉見氏」(全7回)

### 最終回 明暗を分けた新しい時代への対応

【問い合わせ先】市文化財課 ☎ 31-0623

豊臣秀吉が天下を統一し、江戸幕府による泰平の世が実現する時代の変革期に、益田氏と吉見氏の明暗は大きく分かれます。

両氏が属していた毛利氏は、慶長五(一六〇〇)年の関ヶ原後に領地を大きく削られ、周防・長門(山口県)のみを認められます。そして、毛利氏は萩を本拠に定めましたが、ただでさえ領地が大きく削減された上に、関ヶ原の合戦に先だって領地からすでにその年の税を徴収していたため、新たにその領地に入ってきた大名たちから税の返還を求められ、大きな財政問題を抱えてしまいます。

この問題解決にあたったのが益田元祥でした。元祥は、毛利氏家臣団にそれぞれの領地の削減を説得し、財政の建て直しに成功しました。そもそも元祥は、徳川

家康から大名にするという誘いを受けていましたが、これを断って毛利氏に従っていました。さらに関ヶ原以前に、益田氏領の所領替えが検討された際、元祥は自ら所領替え先の希望を述べています。他の多くの領主たちが所領替えに抵抗していたのに対して、これは特筆すべきことです。元祥は

時代の変革期にうまく対応し、毛利輝元の信頼を得て、江戸時代に益田家が長州藩の永代家老となる基礎を築きました。

一方で、吉見氏はこの時代の変革にうまく対応できませんでした。原因は様々考えられます。吉見氏にとって、毛利氏とともに大内氏を滅ぼした同盟相手であり、同格意識があったものと思われ、特に萩は自力で占領した地域であり、そこに毛利氏が本拠をかまえたことは面白くなかったと考えられます。そうしたこともあってか、吉見広長は毛利氏に対して反抗的な態度をとり続けました。それは、当時の「かぶき者」(江戸時代初期に流行した反体制的行動をとる社会風潮)の影響を受けた可能性もあります。

このような広長の態度は問題視され、最終的に広長は自殺に追い込まれました。吉見家は広長の姉妹と縁組みした、吉川広家の二男(吉見政春、のちに毛利就頼)が相続し、大野毛利家として存続することになります。